



# バラ

## 沿革

日本には古くから野バラが自生し、「宇万良」「ソウビ」の呼び名で万葉集や源氏物語にも登場する。江戸時代には何種類ものバラ(ヨーロッパから持ち込まれたものを含む)がすでに栽培されていたようだが、もっぱら庭園用であった。切り花用の温室栽培が始まるのは、アメリカから栽培技術が導入された大正時代。その技術が各地に伝播していった。

愛知県で温室栽培が行われるようになったのは、戦後間もなくのこと。知多市で最初に導入され、昭和30年代に西尾市や蒲郡市に広がり、今では三河地域を中心に全国一の産地を形成するに至っている。

この間、バラ栽培の研修生を受け入れたり、第2次構造改善事業でバラ温室団地を造成したり、さまざまな取り組みが行なわれた。

## 商品知識

バラの品種は極めて多い。その美しさや豪華さからインテリアシンボルとしての価値が高く、「花の王者」とも呼ばれている。

野生種(原種)は北半球の各地に100種以上あり、日本には「ノイバラ」「ハマナス」などがある。今日、一般に栽培されている品種は原種を交配した高度な雑種であり、これまでに発表された数は1万種を超えている。原種を交配する品種改良は19世紀に発達し、初めて人工交雑によって生まれたのが「ラ・フランス」である。1867年、ナポレオンの皇后ジョセフィーヌのバラ園で行われた。

一般にラ・フランスより前の品種をオールド・ローズと総称し、それ以降をモダン・ローズと総称している。モダン・ローズはおもに四季咲き性で、豪華な花形と色彩が特徴。現在、栽培

### スタンダード系



スウィートアヴァランチェ



サムライ08



ゴールドラッシュ



アヴァランチェ

### スプレー系



ファンシーローラ



ファイヤーキング



フレアー



ビビアン

されているその系統は「つるバラ系」「四季咲き大輪系」「四季咲き中輪系」「ミニチュア系」に大別される。

つるバラ系：

茎がつる状。3～5メートルに達する多数の枝を伸ばす。

四季咲き大輪系：

四季咲き。通常1本の茎に大輪の花を1輪つける。いわゆる剣弁高芯咲き。

四季咲き中輪系：

四季咲き。横方向に枝分かれする茎に10輪前後の花が房になって咲く。

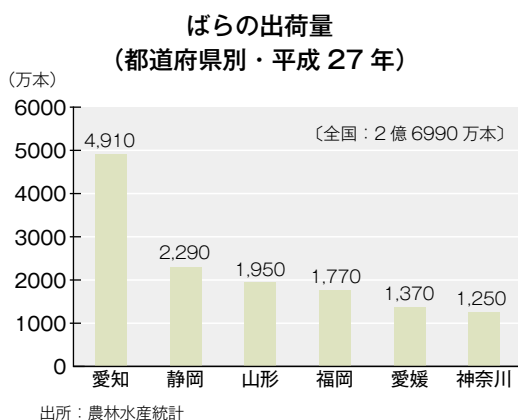
ミニチュア系：

四季咲き。1つの茎に複数の2～5センチの小輪の花を房状に咲かせる。

19世紀以降、新品種が次々と作出されたのは、交配によることのほか、人工授粉による育種技術が確立されたことも大きい。近縁種間の交雑で花形、色、香り、四季咲き性など、遺伝的な性質に革命的な変化が生じた。

## 生産状況

愛知県の切りバラ生産量は全国1位。平成27年産の年間出荷量はおよそ4,910万本。国内



の約18%のシェアを占める。

栽培が盛んなのは県全体の約70%を産する田原市、豊川市、豊橋市を中心とする東三河地域と、約15%を産出する西尾市を中心とする西三河地域。

おもな栽培品種は、スタンダード系ではピンクの「スウィートアヴァランチェ」、赤の「サムライ08」、黄の「ゴールドラッシュ」、白の「アヴァランチェ」など。スプレー系ではピンクの「ファンシーローラ」、赤の「ファンファール」、黄の「フレアー」など。

栽培面積の8割以上に「ロックウール栽培」が導入されている。ロックウールというのは、玄武岩や鉄鉱石から鉄を取り除いたスラグをコークスや石灰石と混合して高熱で溶解、回転シリンダーにかけアメ状に繊維化した人造物繊維。このロックウールを利用して苗を作る栽培法がロックウール栽培である。この栽培法はバラとの相性が大変に良く、品質向上に大きく貢献している。

## 動向

日本でバラといえば、先の尖った花卉が八重に巻き上がって咲く剣弁高芯咲きの人気が高い。しかし近年、丸弁が内側に収まり、花全体がカップ状になる「カップ咲き」や、複数の花卉が層を成すように重なり合う「ロゼット咲き」

など、剣弁高芯とは趣を異にする花型の品種が人気を博すようになってきている。満開時の直径が20センチ近くもある巨大輪が登場し、大きな花も好まれるようになってきている。トゲのない品種も開発されている。

バラ生産における要諦は、売れる品種（人気品種）の選定、上手く栽培する技術、いかに販売するかという販売戦略。この三つが噛み合わないとき収益に結びつかないことが多い。人気の花型や色などを掴むためにアンテナを高くしておくことが不可欠。他のバラ産地への視察や、卸売業者、市場関係者、種苗会社との頻繁な情報交換が重要になっている。



出荷作業

### 《バラ栽培》

- ① 苗作り……数枚の葉を残したバラの茎をロックウールのキューブに挿して苗を作る。根ができるまでは葉に霧状の水を散布する（給水）。
- ② 定植……しっかりとした根が生えてきたら定植。根をしっかりと張るまで肥料を与えずに。定植後の苗の葉焼けを防ぐため、ハウス全体を遮光する。
- ③ 折り曲げ……最初に出た2～3本の芽を折り曲げて光合成専用の枝にして、茎花の長い花を採花する。あとから出た芽は摘む。これをアーチング栽培方式という。折り曲げるタイミングが重要で、早すぎるとバラに負担がかかり枯れることもある。
- ④ 芽かき……バラが生長するにつれ、生えてくる余分な芽を定期的に剪定。手間がかかり、根気の要る作業だが、花を育てるには欠かせない。
- ⑤ 収穫……生長して、咲く前の基準に達したものは収穫する。収穫は午前中と夕方の涼しい時間帯の一日2回行うケースが多い。収穫後すぐに水揚げを行い、品質維持に努める。



①苗作り  
(ロックウール)



②定植



③折り曲げ



④芽かき

取材協力・写真提供：JA ひまわりバラ部会  
金田バラ園



# カーネーション

## 沿革

カーネーションが日本に導入されたのは江戸時代初期。オランダからもたらされたため、当時は「オランダナデシコ」「オランダセキチク」などの名で親しまれた。

愛知県では昭和の初めに知多市で営利栽培がスタート。戦後は半田市で盛んになり、栽培面積が急拡大した30年代、半田は県下一の産地を形成した。

現在、市町村別の生産量で日本一とみられる西尾市で栽培がはじまるのは昭和35年頃。温暖な気候と区画整理された平坦な土地に恵まれ、規模を拡大しやすい条件がそろっていた西尾市は、設備の近代化や省力化を推進し、外国の優良品種も積極的に導入しながら、産地へと成長を遂げた。

## 商品知識

カーネーションはナデシコ科ナデシコ属の多年草。花色は赤やピンク、白、紫、黄色など、

さまざまな色がある。一本の茎に大きな花を一輪つけるものをスタンダードタイプ、三つ以上の複数の小さな花をつけるものをスプレータイプと呼ぶ。

生花店には色とりどりのカーネーションが並んでいるが、すべて品種が異なる。ヨーロッパでは品種改良が16世紀から行なわれ、いま主流の品種は19世紀のフランスで誕生したものとされている。

常に品種開発競争が起きており、毎年新しいカーネーションが生まれている。世界中の育種会社や種苗会社は、開発した品種の母株の脇芽から苗を量産して生産者に供給。なかには日本で開発されたカーネーションもある。「花火」「初恋」などの和名がつけられ、世界中で栽培されている。

## 出荷状況等

カーネーションの出荷のピークは、4月下旬から母の日の前のおよそ2週間。年間出荷量の





4分の1がこの時期に集中する。

ちなみに、母の日にカーネーションを贈る習慣は20世紀初頭のアメリカで広がり、日本では戦後になって本格的に普及したとされている。

平成27年の愛知県の出荷量は約4700万本。長野県に次いで2位となっている。

全国のカーネーションの年間消費量〔国内出荷量+輸入量〕は、およそ6億1000万本（平成26年）。おおむね横ばい推移しているが、内訳をみると国内出荷量が減少する一方、輸入の増加が目立つ。17年に1億6000万本だった輸入本数は、26年には3億2000万本へと、10年で倍に増えている。輸入は6割超をコロンビア産が占める。

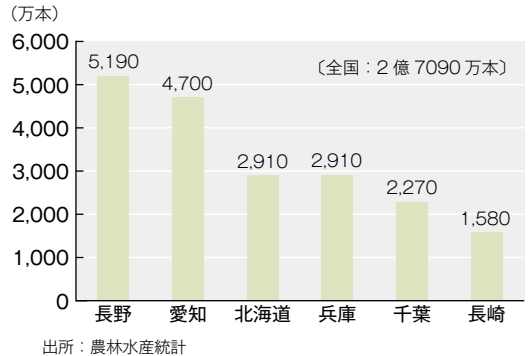
輸入が増えるようになったのは、関税が廃止された昭和60年以降のこと。冷蔵輸送技術が長距離輸送を可能にしたことと、カーネーションの花は落ちにくく輸送に適していたことも一因とみられる。

こうしたなか、西尾産地では輸入品との差別化に取り組んでいる。カギは品種選び。日本人は花形や色合い、弁が丸く、茎が固くしなやかなものを好む傾向があるといわれ、そうした品種を優先することで国産ブランドの価値を高めたいとしている。

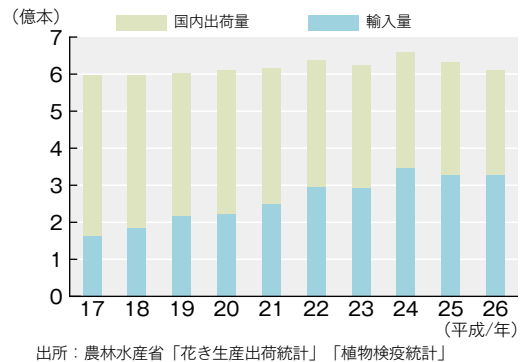
このほか、栽培ハウスの省エネ化の推進や、花の鮮度を保ち日持ちを良くする流通体制の確立にも力を入れる。さらには、フラワーバレン

タインデーなどの新たな物日、購入のきっかけづくりを企画。需要全体を底上げし、花の文化を根づかせることを目指している。

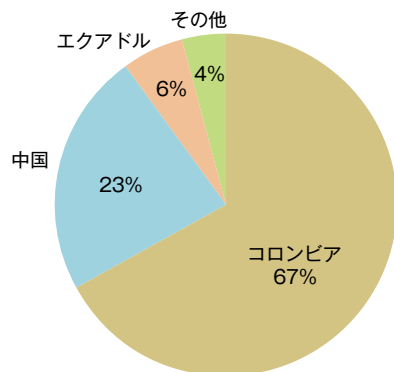
カーネーションの出荷量  
(都道府県別・平成27年)



カーネーションの国内出荷量と輸入量



輸入国 (平成26年)



取材協力：フジ・プランツ株式会社（西尾市）



# シクラメン

## 沿革

日本にシクラメンが導入されたのは明治時代のこと。愛知県でシクラメン栽培が広がるのは昭和30年以降である。植物専門の市場が開設されるとともに販売・流通機構が整備され、大量生産が可能になったことが背景にある。

昭和50年代に入ると、鉢花生産品目の多様化や収益性の問題などから一時的に生産量は減少するが、豊川市や豊橋市などでトマトやメロンからシクラメンへの転作が行なわれると再び増加に転じ、今日に至っている。

## 商品知識

「鉢物の王者」シクラメン。サクラソウ科の多年生球根植物で、原産地は地中海の東部あ



生産者の「個性」が表れるシクラメン

たり。20種ほどある原種のうち、ベルシカム種から生まれた改良品種が現在の園芸品種の主流。

シクラメンの和名は「カガリビバナ」。原種の花びらの先端がよじれて上を向き篝火かがりびのように見えることから名づけられた。また、かつて西洋で豚がシクラメンの球根を好んで食べたため、美しく清楚な花には相応しくない「ブタノマンジュウ」という別名もある。

花は長さ15～20センチの花柄（花軸から分かれ出て、その先端に花をつける小さな枝）のうえに着生し、開花すると花筒部は下向きに、5弁の裂片は上向きになって特異な花形が現れる。

シクラメンは園芸品種が多すぎて分類が難しいとされるが、一般的には株の大きさで「スタンダード」「ミニシクラメン」「ガーデンシクラメン」に分類する。このほか、花形や咲き方、花弁色で分類することもある。

冬の室内を華やかに飾る代表的な鉢花であるシクラメン。とくにクリスマスシーズンには花屋の店頭を賑わす。日当たりのよい涼しい場所に置くと長持ちする。

## 栽培方法

シクラメンは雨にあたると病気になりやすいため温室で育てられる。11月中旬にゴマ粒ぐらいの種を蒔くと、12月中旬に発芽する。3月にポットに、5月中旬に鉢に、それぞれ植え替えをする。開花は10～11月、12月中に出荷する。

水遣りは鉢が並ぶレーンに水を流し、鉢底の受け皿から水を吸わせる底面給水が一般的。吸わせたら根腐れしないように受け皿の水は捨てる。手遣りにくらべ出荷量が2～3倍に増加す



るという。

美しく見せるために、どこからでも出てくる蕾を真ん中に寄せて立たせ、上を向いてくる葉を下におろす。花は真ん中に、葉はどんぶりを伏せたように丸くなるように仕上げる。

種蒔き、植替え、仕上げは、一鉢ずつ手作業で行ない、出荷までに相当の手間をかける。

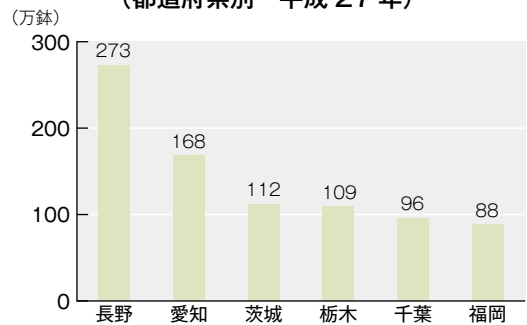
贈答用のシクラメンは、たくさんの花が一斉に咲くように出荷時期に合わせて温室の温度調整をしている。

なお、設楽町など寒冷地で栽培されるガーデンシクラメンは、寒さに強いので屋外で育てられる。

## 出荷状況

愛知県のシクラメンは、豊川市、田原市、設楽町を中心に生産されている。平成27年の県

シクラメンの出荷量  
(都道府県別・平成27年)



出所：農林水産統計

の出荷量は約168万鉢。長野県に次ぐ全国2位となっている。

出荷量の推移をみると、平成16年の309万鉢をピークに減少をたどっている。後継者不足などが影響しているとみられる。



# 春日井のサボテン

## 商品知識

サボテンはメキシコを中心とした南北両アメリカ大陸の熱帯から亜熱帯にわたる乾燥地帯に成育する多年生の「多肉植物」である。「多肉植物」というのは、水分をたくさん蓄えられるように体のどこかが変化した植物で、押し花にできないほど葉や茎が肉厚になっているものの総称。多くの多肉植物は葉が多肉化しているのに対し、サボテンは茎が多肉化しており、葉はトゲに変化したものと考えられている。

「多肉植物」の一種であるサボテン類をとくにサボテンと呼ぶのは、サボテンの種類が非常に多いからである。さまざまな気候や土地に適応できるように独自の形に進化したサボテン。これまでに3,000種以上が確認されているが、まだ発見（確認）されていない種も少なくないとみられる。

サボテンと多肉植物の違いはトゲの有無と思われやすいが、そうではない。違いは「棘座」の有無。棘座というのはトゲの根本にある座布団のようなもので、棘座のあるものがサボテン、ないものが多肉植物。サボテンのなかにはトゲ

のない品種もあるが、棘座があればサボテンに分類される。

「木の葉サボテン」「ウチワサボテン」「柱サボテン」。サボテンはこの3つのグループに大別され、木の葉サボテンは、葉の形状を残して、普通の樹木に見えるのが特徴。ウチワサボテンは、平たくて円盤状のものや円筒形のものがあり、柱サボテンには、柱状や長円形、球状のものがある。身近で見かけるサボテンのほとんどは柱サボテンの仲間だが、球状のサボテンは「玉サボテン」と呼ぶのが一般的。

降雨量の少ない砂漠に生えているイメージのあるサボテンだが、実際には森林や雪が降るような高地にも生息している。雪が降るような場所に生えているものは、白い毛を体に巻いて風雪が直接当たらないようになっているサボテンである。

ときどき、サボテンを「シャボテン」と呼ぶことがある。そのむかし、サボテンの茎で衣類の汚れを拭き取ったりしていたため、“シャボン”の意を当てたものが「シャボテン」に転じたといわれている。

## 多肉植物





## 出荷量

愛知県農林水産部の調べによれば、愛知県における平成26年産のサボテンの出荷量は238万鉢。産出額は1億519万円。いまは全国統計が公表されていないので正確には分からないが、県のサボテン生産は全国トップクラスにあるとみられる。平成元年から18年（公表された最後の年）までの全国統計の「サボテン及び多肉植物」の出荷量を追ってみると、愛知県は常に1位か2位にあって、19年以降もサボテン業界に大きな構造変化は起きていないと考えられるので、現在も上位にあると推断できる。

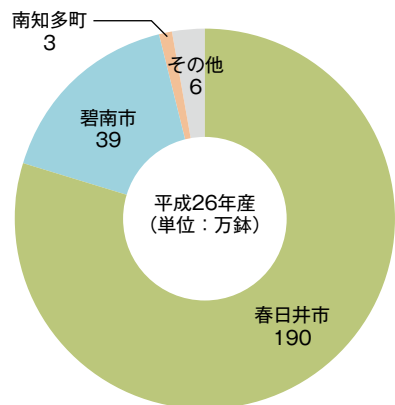
県内の出荷量を市町村別にみた場合、もっとも多いのは春日井市の190万鉢。県全体の80%を占め、2位の碧南市を大きく引き離している。

## 産地の特徴

県内トップの春日井は、国内有数のサボテン

産地である。この産地をもっとも特徴づけているのが、<sup>みしょう</sup>実生サボテンの生産。実生サボテンとは、種から育てるサボテンのこと。サボテンも植物だから花を咲かせて種をつくる。その種を採取して、サボテンの苗を生産するのである。春日井で生産されている実生サボテンは全国の

サボテンの市町村別出荷量



出典：愛知県 花き生産実績

80%前後を占め、その種類は300以上もあるといわれている。

サボテン生産が春日井で盛んになったのは、実生づくりから、育苗、最終商品の出荷までを業者間で分業したことが寄与している。この体制を産地では「分業委託生産システム」と呼んでいるが、システムは1次生産から3次生産まであって、それぞれの生産に特化した業者が従事している。(1次生産と2次生産を兼ねる業者もいる。)

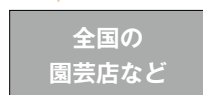
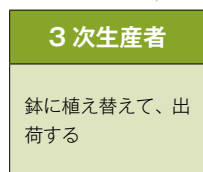
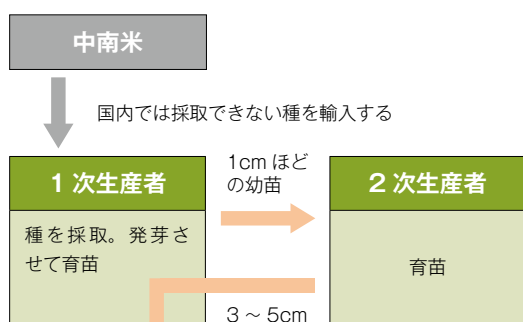
1次生産者は実生づくり。種を発芽させ、6ヵ月程度育苗し、1センチほどの幼苗にして、2次生産者にそのあとを委託する。使用する種の半

分は産地内で交配した種、もう半分は中南米から輸入した種。輸入するサボテンの種は国内業者では採取が難しいとされる種で、たとえば、栽培ハウスの高さを超えるほど成長しないと花をつけにくい柱サボテンの種は輸入するしかない。そういうサボテンは天井に<sup>つか</sup>かえて開花しない。

2次生産者は育苗を担当。1次生産者から委託を受けた幼苗を1年～1年半かけて移植を行いながら育苗し、小苗～中苗(直径3～5センチ)まで育てあげ、それを1次生産者へ戻す。

1次生産者はこの段階で苗を全国のサボテン業者へ出荷するが、国内の80%を占めるのは、この苗の出荷量である。

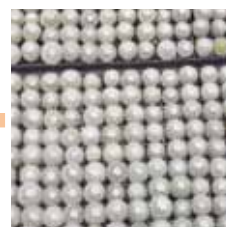
### 春日井のサボテン栽培



種を採取



播種して1週間～10日で発芽





春日井でサポテン栽培がはじまるきっかけとなった「緋牡丹」

春日井の分業システムにおける3次生産者は、1次生産者からその苗を仕入れ、鉢に移し替えるなどして最終商品に仕上げ、各地の園芸店などに販売する。最近は園芸店を通さずに、直接、最終消費者にネット販売するケースも増えている。

## 沿革

春日井でサポテンの栽培が始まったのは昭和28年頃のこと。桃山町で果樹栽培を営んでいた伊藤龍次氏が「緋牡丹」という真っ赤なサポテンに魅せられ、同業の関戸貫一氏に副業としてサポテンを栽培しないかと提案し、両氏が小牧のサポテン農家から種を分けてもらったことが発端となっている。

当時、実生栽培は種の消毒に手間がかかり、大量生産には向かなかったが、彼らは外国から高価な種を購入して栽培方法を研究。当初は種を播いても発芽しないことが多く、苦労したようである。発芽しなかった理由は、あとで分かったことだが、種そのものが粗悪品だったからで、

それでも発注を繰り返していくと良質な種が届くようになったとされている。

転機が訪れたのは昭和34年の伊勢湾台風。それまで桃やリンゴなどを盛んに生産していた桃山地区。伊勢湾台風で果樹が壊滅状態に。ちょうど、その頃、サポテンの実生栽培にメドが立つようになっていた伊藤と関戸の両氏は、主力を果樹からサポテンに転換することを決意。しばらくして、関戸氏が消毒せずに大量生産できる画期的な方法を考案すると、徐々に実生サポテン栽培への参入が増え、昭和30年代半ばからのサポテンブームも追い風になって、春日井は日本一の産地へと発展した。最盛期には大小あわせて70軒ほどのサポテン業者がいた。

当時のサポテンブームは相当にヒートアップしていたようで、栽培中のサポテンが盗難に遭ったという、今では考えられない話も伝わっている。

現在の春日井のサポテン業者は1次生産者から3次生産者まで合わせて9軒にまで減っている。後継者難が大きな理由のひとつになっている。



播種後 30 年経って初めて花が咲く「金鯪」。その後は毎年花をつける。

品種の数が非常に多いサボテン類は、品種によって生長のスピードや開花の時期にも大きな違いがある。播種後 1 年半～2 年で花をつける早いものがある一方で、5 年経っても 2～3 センチしか生長しない遅いものもある。前者の代表は「雪晃」「玉翁」「澄心丸」といった品種。後者の代表は「金鯪」や「偉冠竜」など。金鯪は種を播いてから 30 年経って、ようやく最初の花が咲くという遅さだ。

実生サボテンの生産者が主力にしているのは、比較的生長の早い品種である。消費者ニーズがそういう品種に集中しやすいのが理由のひとつだが、種ができるまで長い年月を要する品種の栽培はビジネスとして成立しにくいという側面もあるようである。

一般的にサボテンにはトゲがある。ところが、最近、トゲのないサボテンのニーズが高まっている。「トゲに触れると痛い」という消費者の訴えが多いという。トゲは痛いに決まっているが、そのニーズがある以上、トゲのないサボテンやトゲに触れても痛くないサボテンへの品種改良を進めなければならない、実際に行われている。品種改良は、春日井の場合、その専門機関があるわけではなく、実生づくりの現場で試行錯誤が行われる。

あるサボテンの種を 1 万粒ぐらい播くと、そのうちのいくつかはトゲがなかったり、少なかったりするサボテンに突然変異することがある。そういうサボテンばかりを集めて、掛け合わせを繰り返すことで狙ったサボテンを作り出す。「エルサム」という品種は、そうして改良されたサボテンのひとつ。原種は鋭いトゲのあるサボテンだが、生産されているエルサムは触っても痛くない。

消費者にとってサボテン栽培の魅力は、グロテスクな姿とは対照的に美しい花を咲かせるお

もしろさや、手軽に栽培ができるところ。室内園芸として、あるいはグリーンインテリアとして、サボテンを楽しむ人も少なくない。近年、サボテンを趣味として本格的にコレクションする人が再び増えている。おもに過去のサボテンブームを経験した団塊世代の男性で、若い頃に熱中したサボテン蒐集を退職を機にまた始めようとする人たちが。当時できなかったことが今ならできる。庭に小さなサボテン用ハウスを作ったり、縁側に展示用フレームを置いたりしてサボテンを楽しむ愛好家も増えつつある。

サボテンは食べられる。メキシコなどでは普段からウチワサボテンを食べているという。他のサボテンも食べようと思えば、食べられないことはないが、習慣的に食べられているのはウチワサボテンだ。

サボテンには、緑黄色野菜と果実の両方の栄

養素が含まれており、低カロリーで繊維質も豊富。糖尿病や高コレステロール、動脈硬化の予防・改善が期待できるほか、整腸作用や疲労回復・精神安定を促す効果などもあるといわれている。

サボテンが食べられるとなれば、日本国内ではサプライズをもって迎えられる。春日井では10年ほど前から、食用ウチワサボテンの栽培を増やし、それをアイスクリームや、きしめん、お茶などの食品に加工したり、市内の飲食店でサボテン料理を提供したりする取組みをはじめている。

ウチワサボテンの旬は、“新芽”が美味しい夏だ。春日井商工会議所の「サボテンプロジェクト」のホームページには、ウチワサボテンは、苦みがなく、さっぱりとした味わい。やみつきになる味と記載されている。



食用ウチワサボテン



# 洋ラン

## 沿革

日本における洋ラン（熱帯・亜熱帯地帯を原産とするラン）栽培は、明治16～17年、施設栽培の創始者である福羽逸人が始めた。愛知県では大正時代に始まったが、当時は一部の愛好家や生産者に限られていたようである。

それが急速に広がるのは昭和40年代。「メリクロン培養」や「山上げ栽培」の普及で出荷可能な時期が広がったことが要因として大きい。この時代に、安城、豊田、豊橋、渥美の観葉植物の栽培業者が洋ランに移行したようである。

メリクロン培養とは、新芽の生長点を細胞分裂によって増殖させ、親株と同じ花、同じ性質のもの（クローン）を作り出すバイオ技術のことで、昭和35年、フランス人モデルが完成させた。この技術によって苗の生産量が一気に増

加、ラン栽培の普及を後押しした。

また、山上げ栽培は、花芽のついた株を夏の暑い時期に高冷地に移し、開花を促進させる方法で、とくにシンビジウムやデンドロビウムの栽培効率化に寄与した。

昭和60年代には胡蝶蘭（ファレノプシス）、デンファレ、オンシジウムなどの苗の輸入がはじまり、平成に入る頃には胡蝶蘭で「国際リレー栽培」が採用されるようになる。国際リレー栽培とは、培養から開花株になるまでの育成を台湾で行ない、その株を輸入して日本で開花させる方式である。

国内有数の鉢もの専門市場である豊明花き地方卸売市場が開設された平成8年以後、愛知県のラン生産は飛躍的に増大した。



## 商品知識

ラン科の植物は単子葉植物の一種で、熱帯から亜熱帯を中心に700～800属、2万～2万5000種が分布する世界最多の植物群である。両極地帯を除く南北両半球に広く分布し、とくに熱帯に種類が多い。日本には約75属230種ほどある。

「属」というのは、花や茎、葉などの特徴からグループ分けした単位で、「シンビジウム」や「カトレヤ」といった呼び名はそれぞれの属の名前である。

ランは交配などのしくみから進化の頂点にある植物と考えられている。種間だけでなく、属間の交配も容易なものが多く、人工的に新しい種も数多く作出されている。

交配で作り出された品種数は、サンダースリスト（英国王立園芸協会が発行するランの品種登録リスト）に登録されたものだけでも10万種以上あり、しかも毎年あたらしい品種が生み出されている。

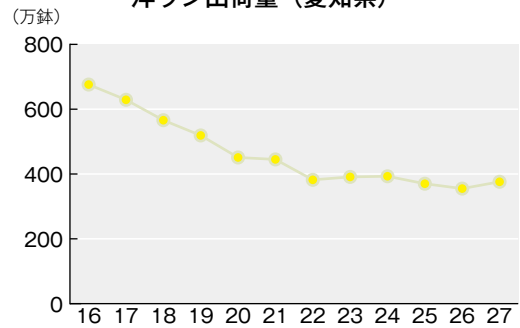
ランを「洋ラン」と「東洋ラン」に分けることがあるが、これは原産地には関係のない園芸上の分け方である。欧米で改良されたものが洋ラン。東洋に産する原種あるいは原種の突然変異をそのまま維持してきたもので、希少価値や

観賞価値の高いものが東洋ラン。洋ランの代表格は、胡蝶蘭、シンビジウム、デンドロビウムなど。東洋ランには、カンラン、セッコク、フウランなどがある。

洋ラン類（鉢もの）出荷量  
（都道府県別・平成27年）



洋ラン出荷量（愛知県）



## 《胡蝶蘭の国際リレー栽培》



培養から開花株になるまでの育成を台湾で行う。(写真は輸入されたプラスチック苗)

開花までを日本で行う

## 出荷状況

平成 27 年の全国の洋ラン（鉢もの）出荷量は約 1,600 万鉢。このうち愛知県の出荷量は 376 万鉢。全国シェアの 23.5% を占め、全国一の産地を誇る。

胡蝶蘭をはじめ、シンビジウム、デンドロビ

ウム、カトレアなど、数多くの品種が生産されているが、平成 10 年以降は胡蝶蘭が急増している。元来 12 月～4 月に限られていた出荷時期が、夏場に温室を冷房する技術が開発され、周年出荷が可能になったことが影響している。

	胡蝶蘭（ファレノプシス）	シンビジウム	デンドロビウム
			
科・属名	ラン科・ファレノプシス属	ラン科・シンビジウム属	ラン科・デンドロビウム属
原産地	フィリピン、インドネシア、タイ、ビルマ、インド	中国、ネパール、インド、タイ、オーストラリア、日本など	熱帯アジア中心、ネパール、ニュージーランド、日本
分類	多年草、常緑、非耐寒性	多年草、非耐寒性	多年草、着生蘭、非耐寒性
開花期	周年（温室）、家庭：春～秋	1 月～5 月	2 月～5 月
草丈	20～100cm	30～80cm	20～80cm
花径	3～12 cm	4～8cm	3～8cm
花色	白、ピンク、黄など	白、ピンク、赤、黄、橙、緑、茶など	赤、ピンク、オレンジ、白、青、紫、黄、緑、茶など
増やし方	高芽植え付け、花茎切り	株分け	株分け、高芽植付けなど
用途	鉢植え、切花	鉢植え、切花	鉢植え
生活様式（どこで育つか）	樹木や岩などに根を張る着生ラン	地面に根を張る地生ラン	着生ラン
特徴	大輪のほか、ミニコショウランもある。贈り物として人気がある。1～3 か月花持ちする。	日本に初めて紹介されたランで、1859 年トーマス・グラバーによって持ち込まれた。日本で一番流通している洋ラン。	ランの中では寒さに強く育てやすい洋ランであるが、花を咲かせるのが難しいとされている。
花言葉	あなたを愛します、幸福が飛んでくる	飾らない心、素朴	わがままな美人、天性の華を持つ



## 観葉植物

### 沿革

愛知県で観葉植物の栽培が始まったのは、明治43年。名古屋市商品陳列館内に温室が建設された時といわれている。外国産の多くの植物が入られ、その中にクロトン、ドラセナ、ベゴニア・レックス、フェニックスなどの観葉植物が含まれていた。

このあと、観葉植物のコレクションを楽しむ愛好家が現れたようだが、本格的な営利栽培に発展することはなかった。

営利栽培の芽が育ちはじめたのは昭和20年代のことで、30年頃から各地で先駆者らによる生産がはじまり、とくに豊橋や知多で盛んになった。30年代の半ば、すでに愛知県は全国一の産地としてその名を馳せていた。

40年代の初め、アナナス類を筆頭に観葉植物ブームが起こったが、当時は業務用がほとんどで、主にレンタル品として扱われた。

平成に入る頃から家庭用の需要が伸長し、商品構成も大型の鉢物に替わって、小型の鉢物、ミニ観葉、花つき観葉へと変化した。

現在は商品の一部である鉢や仕立て方に工夫を凝らし、インテリアとしても通用する観葉植物が多数生産されている。



### 商品知識

観葉植物とは、葉を見て楽しむ植物のうち、熱帯・亜熱帯地域原産のもの。ほとんどが屋外で越冬しない。魅力はエキゾチックな美しい葉の数々が観賞できる点で、今日では何百という種類の中から、あらゆる大きさ、形、色、手触りのものが選べるようになっている。

### 出荷状況

愛知県の平成27年産の観葉植物の出荷量は約2200万鉢。全国シェアは50%を上回っており、他県の追随を許さない断トツを誇る。市町村別では、田原市、西尾市、岡崎市で出荷量が多い。



取材協力・写真提供：有限会社三浦園芸（岡崎市）



# 植木

## 商品知識

愛知県の植木生産は、鎌倉時代後期の1328年、現在の稲沢市矢合町にあった国分寺住職柏庵禅師が、中国から柑橘類の接木技術と種子を持ち帰り、近隣の農家に伝授したのがはじまりとされている。

明治時代、稲沢や祖父江を中心に、桑苗木、山林苗木、果樹苗木といった苗木類の生産が盛んに行われるようになるが、この苗木類と密接に関連する植木も同じ時期から増えはじめ、稲沢を中心とする地域は産地を形成。需要が増加した大正時代には規模を急速に拡大した。

生産拡大は昭和15年ころまで続くが、その

間、全国規模での植木取引がはじまり、仲買業を行う生産者も現れた。稲沢が植木の4大生産地のひとつに数えられるようになるのもこの時期である。

太平洋戦争で大きな被害を受けた稲沢の植木産業も、高度経済成長期を通じて実施された大型事業（東京オリンピック、大阪万博）や公共事業（道路、公園、住宅団地などへの植栽工事）などを機に再び生産が活発になり、稲沢の「植木王国」の名は、次第に不動のものになっていった。

## 産地の特徴

稲沢は木曾川の沖積層からなる肥沃な土壌が広がり、適度な寒暖があるため植木生育に適している。冬に吹く冷たくて強い「伊吹おろし」は、植木の地上部分の生長を抑制するが、肥沃な土壌のもとで根の部分は丈夫に生長するため、この地域で産出された植木はどこに植えても根づく良質なものとなる。

栽培樹種は、マツに代表される庭園用から、イチョウに代表される公共緑化用（街路樹用）までさまざま。稲沢ならば何でも揃うといわれるほど樹種は多いが、少量生産のものが多く、とくにサザンカの種類は多く、なかでもベニサザンカに人気が集まっている。

稲沢市では毎年「いなざわ植木まつり」を開催し、植木・盆栽・観葉植物などの展示即売会を行っている。また、愛知県は稲沢市の植木生産者の知識と技術の向上を図り、生産振興に寄与するため、愛知県植木センターを昭和61年に設立、植木生産や造園施工の基礎と実務的な研修を行なうなど、人材養成に力を入れている。近年、社会学習の一環として地元の小学生に樹木を見学させたり、植木や苗木に触れさせて樹





木の生長の変化を気づかせたりする現場体験学習も積極的に取り入れている。

## 商品知識

植木として使われる樹木は多種多様。おおむね以下のように大別される。

### ■針葉樹

針のように先が尖った細い葉を持つ樹木。マツ、スギ、ヒノキなど。植栽時期は2～4月上旬・10～11月。

### ■常緑広葉樹

一年中落葉しないで、緑色を帯びた葉をつけている樹木。クスノキ、ツバキ、シイなど。3～4月上旬・6～7月の梅雨期に植栽。

### ■落葉広葉樹

一年以内で成葉が枯死し、一定の休眠期間後に再び新葉をだす樹木。カエデ、クリ、ブナなど。2～4月上旬、10～11月に植栽。

### ■低木性樹木

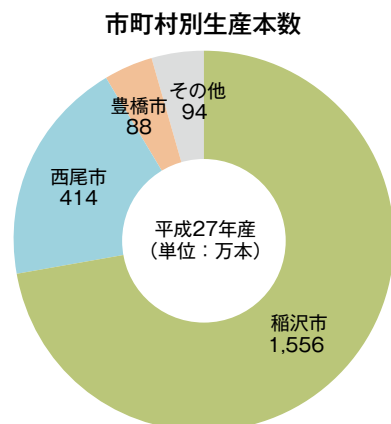
クチナシ、カンツバキ、サツキなど。

## ■竹類・特殊樹木

シュロ類、ヤシ類、ソテツ類など。

## 生産状況

平成27年の愛知県の植木（緑化木）の生産本数は2,153万本。市町村別では稲沢市が1,556万本と県全体の72%を占め、次いで西尾市の414万本、豊橋市の88万本となっている。



出所：緑化木生産状況需要動向調査

取材協力：稲沢市経済環境部農務課  
愛知県植木センター



# 菊

## 商品知識

菊は秋を代表する花のひとつであるが、開花時期によって、夏ギク、夏秋ギク、秋ギク、寒ギクに分類される。

また、開花時の姿から、一輪菊、スプレー菊、小菊に分けられる。スプレー菊は一本の茎に10～20輪の中小花を咲かせる菊。さらに小さい花を多数つけるものを小菊と呼ぶ。

業務用として栽培されるものが多いが、最近では一般家庭用にスプレー菊の側芽をすべて取り除いたディスプレイ仕立てやピンポン仕立てなど、新しい花形や花色の切り花も生産されている。

菊には日長（1日のうちの明るい時間のこと。日の出から日没までの時間に約1時間を足した時間）が短くなると花芽ができ、蕾が膨らみ開花する性質がある。したがって花芽ができる前に電照し、人工的に日長を長くすることによって、自然の開花時期より遅く花を咲かせることができ、逆に暗幕などで光を遮り、日長を短くすることにより、開花時期を早めることができる。

愛知県では、農業試験場や農業改良普及所を中心に開花調整技術の改良・改善を進めた結果、夏秋ギクと秋ギクの電照栽培によって周年生産体制が確立されている。

## 夏秋ギク

自然開花期は7～9月。電照によって6～10月に出荷。品種としては「岩の白扇」「精の波」「優花」などがある。このほか、愛知県が育成した黄色の「夏黄1号」「夏黄2号」も注目されている。

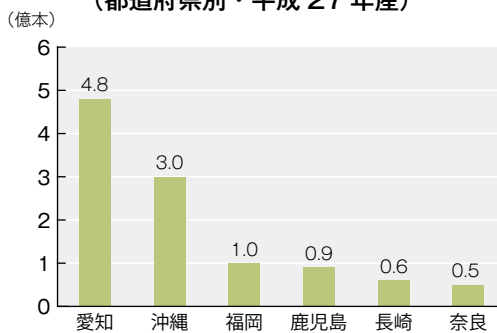
## 秋ギク

自然開花期は10～11月。電照によって11～4月、遮光によって5～6月に出荷。

## 生産状況

平成27年産の愛知県の菊の出荷本数は4億8,080万本。国内シェアは26.8%で、全国一を誇る。県内シェアでは田原市が80%超と、国内屈指の産地を形成する。形態別では、一輪菊80%、スプレー菊18%、小菊2%となっている。

菊の出荷本数  
(都道府県別・平成27年産)



出所：農林水産統計



電照菊 (写真：田原市提供)